

「長州ファイブ」

五十嵐匠監督

これは読書というよりも映画のすすめである。

2006年、意外な人物をヒーローにした映画が作られた。幕末に御禁制を破ってイギリスに渡って西洋文明のあれこれを学び、帰国後に明治日本のリーダーとなった5人の長州藩出身の若者達を描いた「長州ファイブ」である。

「長州五傑」とも呼ばれるこの5人とは、初代総理大臣となった伊藤博文、鉄の父と呼ばれる井上勝、外務卿として不平等条約改正交渉にあたった井上馨、造幣の父といわれる遠藤謹助、そして本エッセイの主題、山尾庸三である。三上は技術者倫理の授業の最終回で過去5年間必ず山尾のことを取り上げてきたので、三上の講義を受講した学生はどこかで聞いたことのある名前だと思ってくれたことと思う。映画の中では俳優松田龍平が演じる好青年であった。

日本の工学の父と呼ばれる山尾庸三は、天保8年（1837）、現在の山口県山口市に生まれ、20代前半を江戸に出て洋式砲術を学んだり、幕府の貿易船に乗り込んでロシア領内沿海州まで探検しながら航海術を学んだり、という冒険的な日々を送った。25歳の時には攘夷を叫んでイギリス公使館焼討ちにも加わった。しかし、翌年にはイギリス商社の手引きによって仲間と一緒に密出国を果たし、ロンドンへと渡った。ロンドンでは最初皆と一緒に英語を勉強したが、その後分かれてひとりグラスゴーに移り、そこでネイピア造船所の見習い工として働く傍ら、グラスゴー大学アンダーソンズカレッジで学んだ。このカレッジはグラスゴー大学物理学教授J・アンダーソンの遺贈により1796年に開設された一般市民を対象とする自然科学講座に由来し、後に英国全土に広がったメカニクインスティテュート運動の発火点となったといわれる学校であった。

禁制を破ってと書いたが、これはなまやさしいことではない。彼が出国した文久3年（1863）、5年後に徳川幕府が倒れるとは誰も予想していなかった。まかり間違えば帰るべき祖国を失うかも知れない命懸けの密航だったのだ。渡英5年目にして日本では大政奉還が行われ、一足先に帰国した長州藩の仲間たちは新政府の中心人物になった。帰国した彼は民部省に職を得て明治政府が江戸幕府から継承した横須賀製鉄所を担当するとともに、工部省設立を提案し、また、明治4年には日本で最初の工学教育機関である工学寮の創設を試みる。このとき、彼のプ

ランに対して、「未だ日本において為すべき工業なし、学校を立て人を作るも何の用をか為さん」との批判があったが、彼は「人を作ればその人工業を見出すべし」と反論して自らのプランを実現させた。

ほぼ同じ頃（明治3年）、長岡では小林虎三郎が米百俵の使い道をめぐって同じような批判に曝されていたが、虎三郎もまた「国がおこるのも、ほろびるのも、町が栄えるのも、衰えるのも、ことごとく人にある。だから、人物さえ出てきたら、人物さえ養成しておいたら、どんな衰えた国でも、必ずもり返せるに相違ないのだ」と言って藩士達を説き伏せていたのであった。

山尾は日本における聾啞教育、盲教育のパイオニアでもある。当時の造船所では鋸打ちの騒音がひどく、そこで働く者達は耳をやられることが多かった。グラスゴーの造船所にもそうした聾者が多数いたが、彼らがたくみに手話を使って健常者と一緒に働いている姿は山尾に強い印象を与えた。そして、帰国後の山尾はイギリスで行われている聾教育を日本にも立ち上げたいと考え、音頭をとったのである。映画の中では聾者の美しい女性とのプラトニック・ロマンスを通じて山尾のこの方面への関心が紹介されるが、このロマンスはおそらく脚本家の創作だろう。

ちなみに聾教育パイオニアの青春時代を描いた映画であるだけに製作委員会に対しては日本語字幕への強い要望が寄せられ、DVD発売の二ヵ月後には日本語字幕付きが発売されたそう（申込み先：山口県字幕サークルEライン、ria@cable.ne.jp）。なお、山尾庸三顕彰会から『山尾庸三傳』（兼清正徳著、2003年、本学図書館にも配備）が刊行されているほか、工部大学校や聾教育の歴史に関する多数の本の中にも彼の生涯が紹介されている。また、山尾の郷里には山尾会館（電話083-984-5121）があり、生家も保存されている。関心あるものは訪ねられよ。

『山尾庸三傳』、兼清正徳著、山尾庸三顕彰会、2003年

執筆者紹介

三上 喜貴

システム安全系教授。専門領域は、産業技術政策論、国際開発論。

『書名』 著者名(翻訳者名) 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

「長州ファイブDVD」五十嵐匠監督・脚本「長州ファイブ」製作委員会 2006年

『山尾庸三傳 明治の工業立国の父』兼清正徳著 山尾庸三顕彰会 2003年 品切・絶版

[ブックガイド目次へ](#)